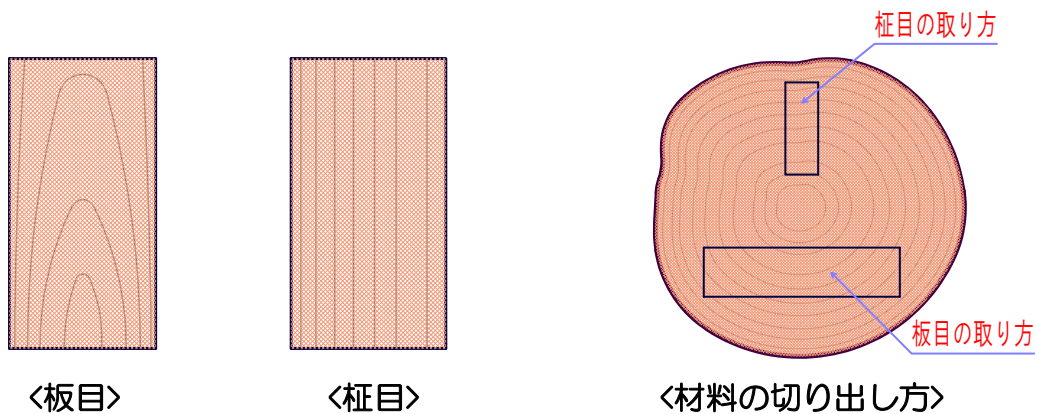


丸太の挽き方と木目

内装材や家具として使用される木材では、その表面の美観の要素として“木目”が重視される場合があります。

木目とは年輪や繊維が材表面に現れた模様のもので、「柾目」と「板目」に大別されます。この木目の差は、年輪に対してどの方向から板を切り出すかで変わってくるものです。



「柾目」は年輪に対して直角に切り出したときに現れ、年輪がまっすぐな直線状に並びます。「板目」は年輪に対して平行に切り出したときに現れ、年輪が波形や山形の変化に富んだ模様となります。

丸太を挽き立てする際は、この木目の出方を考慮して、どの方向から刃物を入れていくかを決定しているのです。

丸太の中心部である芯の部分は、たいていの場合“ワレ”や“節”などの欠点が現れてそのまま使用することが出来ないため、一般的にはカットして除いてしまう部分となります。その結果、年輪に対して直角に切り出す柾目板は芯を挟んで2分割となってしまうため、最大でも丸太の直径の半分の幅しか取れないこととなります。

幅の広い柾目板は、その倍の直径の丸太を用意しなければ採材できないため、大変貴重な板といえるのです。

一方で年輪に対して平行に切り出す板目板は、芯に近い部分から採材できれば、丸太の直径に近い幅の木材が採材可能です。しかし芯に近づくほど欠点が現れる可能性も高くなりますので、幅の広くて欠点のない板目板というのも、柾目同様に採材の難しい木材といえます。

このような木目や幅などの条件により総合的に希少性の高い素材ほど、一般的には価値の高い木材として評価されているわけです。